

食生活ジャーナリストの会シンポジウム
コロナ禍の〈食〉とメディア



2020年11月23日@日比谷図書文化館

河北新報社記者 門田一徳

「鳴子の米」おにぎり専門店 東京に開業



買い物客にゆきむすびをプレゼントする林田さん（左）と高橋さん（左から2人目）

ゆきむすび縁むすび

大学時代調査 女性社員が恩返し

大崎市のNPO法人「鳴子の米プロジェクト」で生産したゆきむすびのおむすび専門店が28日、東京・神保町にオープンした。大学時代に米プロジェクトの取り組みを学び、首都圏で「おむすび権米商」を展開する「イワイ」（東京）に就職した林田悠子さんの29日「東京都大田区」が両者を縁結びした。

林田さんは2007年、地域ぐるみでコメ生産者を支える米プロジェクトを卒業論のテーマに鳴子温泉に滞在した。100人余りを聞き取り調査し、ゆきむすびの出荷作業なども手伝った。イワイに就職したのも、コメの消費拡大を通じて地域を支える同社の経営方針に共感したからだった。

林田さんから米プロジェクト

の取り組みを聞いていた同社の岩井健次社長は、「きっかけは林田さん。地域で頑張る鳴子を応援したいと思った」と説明。取引額は60万、当たり2万4000円、取引量は年15トンを見込む。

28日のオープニングイベントには米プロジェクトの生産者ら12人が駆け付け、林田さんと再会。買い物客に試食用のゆきむすびを一緒に配った。

米プロジェクトでは設立時から、大学生ら若者に食と農業の関わりを尋ねてもらう機会を積極的に提供してきた。8年前、林田さんの宿泊を受け入れた大崎市鳴子温泉の農業高橋正幸さん（75）は、「こんな形でつながるとは思わなかった。一生懸命頑張ってくれたんだね」と目を細める。

林田さんは「鳴子のように地域で頑張っている農家を、東京の人たちが食べ支える手伝いをこれからも続けたい」と笑顔で語った。

2015年1月29日河北新報朝刊

栗原の産品市民に宅配

ツリーリズムネット 送料無料カタログ

栗原市の一般社団法人くりはらツリーリズムネットワークが6月から月1回、地元の野菜や菓子などを市民に宅配するサービスを展開している。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、ネットワークが主催してきた地元の食や文化の体験イベントが開催できず、代わりとして楽しんでもらおうと企画した。

ネットワークの作った「定期便カタログ」から、欲しい商品を選び電話や電子メールで注文して購入する仕組み。送料無料で配達する。6・7月号



くりはらツリーリズムネットワークが始めた無料宅配サービス

10事業者35品 作り手と消費者つなぐ

にはミニトマトやパン、コーヒード豆、切り花など10事業者の35品を掲載した。

出品しているのは、ネットワーク主催のイベントで講師を務めた菓子製造店主や野菜生産者ら。コロナの影響で売り上げが減少した作り手もあり、配達手数料は取っていない。

7月分は約450品の注文があり、ネットワークのスタッフが17日、注文を受けた家庭や事業所に届けた。栗原市若柳の千葉さき子さん(69)はユリの切り花を注文した。「花が新鮮で長持ちしそう。今度は手作りパンを頼みたい」と喜んだ。

コロナの影響で、体験イベントなどは3月から開催を見合わせている。大場寿樹事務局長は「イベントができない分、作り手と地域の人をつなぐ役割を担おうと考えた。コロナの影響を受ける地元の作り手を応援しよう」と注文する方も多い」と話す。

次回カタログは8月5日ごろ発行の予定。ネットワークのウェブサイトに掲載するほか、栗原市築館の市センターチュアリセンターこんちゅう館で配布する。連絡先は同ネットワーク090(4889)5310。

2020年7月28日
河北新報朝刊